

パチンコホール、節電テーマに

各地組合・団体が相次ぎ総会

各地で遊技産業関連の組合・団体の総会が開催され、今夏の節電に対する取り組みが大きなテーマとして取り上げられている。たとえば、大阪府のパチンコホール組合（大遊協）では、月2回以上の休業を含む15%以上の電力削減を決議。関西電力大飯原発は再稼働したが、この決議内容は変更せず実行する。

同様に、電力不足に対する積極的協力が各地の総会で決まる一方、企業単位でも節電に向けた具体策が次々と打ち出されている。

● ピックアップ

■ 6月20日 大阪府遊協、夏季の節電対策を決議
www.yugitsushin.jp/news/6312/

■ 6月26日 NEXUSが日赤群馬支部と合同でヘリコプターを使った災害訓練を実施
www.yugitsushin.jp/news/6376/

■ 6月27日 マルハン、夏季の節電取り組みを発表
www.yugitsushin.jp/news/6401/

■ 6月27日 京業産業がパソコンで実機アプリ

遊技産業はその消費電力について、正確な情報が社会に伝わっていないため、誤解を招いている。正確な情報発信とともに、業界の存続に向けた目に見える形での社会共生努力が不可欠だろう。

関東を中心にパチンコホールを展開するNEXUSは日本赤十字社群馬支部と合同の災害訓練を開催した。同社は、災害時に本社と各店舗の駐車場をヘリコプターの着陸場として提供する協定を日赤群馬支部との間で締結している。このような対応

も震災を経て加速しつつある。

ピックアップには取り上げなかったが、一昨年12月に休館していた東京都台東区の「パチンコ博物館」が千葉県旭市に移転し、再開することが決まった。再開予定日は8月5日。開館するのは毎週日曜日の午前11時～午後4時まで。362平方メートルの広大な館内スペースに、パチンコ、パチスロ、雀球、アレンジボール、ロータリーマシンなど380台の遊技機を展示。遊技産業の歴史的、文化的変遷を追うことができる。

(ニュース提供：LOGOS×遊技通信)

遊べる「KYORAKUサプライズランド」をオープン
www.yugitsushin.jp/news/6407/

■ 6月27日 全商協総会、流通制度の厳格運用を強調
www.yugitsushin.jp/news/6409/

■ 6月29日 北電子、シリーズ最新作「マイジャグラーII」を発表
www.yugitsushin.jp/news/6431/

遊技産業の視点 Weekly View

濱口 理佳

LOGOS

ワールド・ワイズ・ジャパン代表
LOGOSプロジェクト主幹

遊技産業でもCSR（企業の社会的責任）という概念が浸透し、活動も広がりを見せつつある。サステイナブル社会においてCSRへの取り組みは、まさに遊技産業に携わる企業が「企業市民」としての視点を持つ第一歩と認識されるからだ。

これまで遊技産業は社会貢献活動を積極的にを行い、存在意義の強化を図ってきた。実際、メーカーの遊技機リサイクル率は家電や自動車に匹敵するほど高く、生産ラインでの鉛フリー採用は半導体と同レベルにある。その他、業種を問わず、環境対応や地域社会との共生に向けた取り組み、福祉社会の育成に着手。寄付にとどまらない貢献活動に力を尽くしている。

遊技業界のイメージは依然低迷を余儀なくされ、社会悪のように捉える人もいる。反対派によるパッシングなどの現実を考慮すれば、まず遊技産業は「社会においてよい産業」というポジションを確立しなければならない。そのためにも、CSRへの取り組みは重視されて然るべきだろう。

世間にはあまり知られていないが、遊技産業の社会貢献活動の取り組みは早く、CSRやSRI（社会的責任投資）などが取り沙汰されるよりはるか以前から続けられてきた。

業界団体による全国規模での活動のほか、各地域のパチンコホール組合でも地域社会に密着した貢献活動を展開。歴史の古いものでは、東京都のパチンコホール組合青年部による「島田療育園を守る会」の活動や、大阪府の青年部による「未来っ子カーニバル」の開催が挙げられるが、後者は、大阪府下の養護施設などの子供たち（多いときには2000人以上）を招いて手作りのクリスマスの思い出をプレゼントする催しで、昨冬で25回を数えた。

他方、企業単位でも積極的なCSRへの取り組みが確認されている。

AED（自動体外式除細動器）の設置推進、地域のエコ推進、被災地への支援活動、地域や河川の清掃への参加や通学路での児童の見守り活動など、細かいものまで数え上げるときりが無い。かつては金銭の寄付が目立っていた業界だが、一つ一つの活動を見ると、人的支援という「顔の見える貢献活動」や、地域特性を踏まえた「地に足の着いた支援」など、姿勢の変化が見て取れる。

CSRに根差した活動は「実施して終わり」ではなく、これを通じて社会と結びつくことが肝要だ。その意識が昨年以降、業界の中に加速して浸透するのを強く感じている。

■ LOGOSプロジェクト 遊技産業を正確に把握し、対応すべき諸問題の解決に向けた取り組みに着手。同産業に立脚したシンクタンクとして、次世代にふさわしい形での事業承継に向け、ともに考え、スキルアップを図る場を提供する。

はまぐち・りか ワールド・ワイズ・ジャパン代表、LOGOSプロジェクト主幹。関西大学大学院文学研究科哲学専修博士課程前期修了。学生時代に朝日新聞でコラムニストデビュー。海外でのフィールドワークを通じ遊技産業に関心を持ち、関連メディアへ。2009年、ワールド・ワイズ設立。11年にLOGOSプロジェクトを立ち上げた。

人知れぬ貢献事業 社会との結びつき大切に

被災地支援で存在意義

フォーカス レポート

世界を震撼させた東日本大震災から1年以上が経過した。一連の天災や人災は、多くの人々を悲しみのふちに突き落とし、依然その苦しみは続いている。

しかし、復興に向けたあらゆる取り組みの中で、人々は「絆」を再確認し、企業は「社会との共生」を強く意識した。自分たちにできることがあるはずだ、と。それは何か。

社会、人々に生かされている産業の社会的責任の果たし方を遊技産業も懸命に模索。短期、中期、長期の視点でさまざまな支援活動に取り組んでいる。

活動の中には、遊技産業という独自性を意識したユニークな取り組みもある。例えば、パチスロメーカーの組合である日本電動式遊技機工業協同組合とパチスロの販売会社で組織する回胴式遊技機商業協同組合は、「パチボー・スロタンの夏祭り」「TBCラジオ宮城県仮設住宅カラオケ歌合戦」といったイベントを展開している。

これらは全て、人々に遊びを提供するエンターテインメント産業として、笑顔や活気を提供したいとの思いから企画されたものだ。

企業単位で取り組む例もあ



パチボー・スロタンの夏祭りには約3000人が訪れた

る。パチスロメーカーの山佐は「少しでも多くの被災者の方に笑顔を取り戻していただくために」を合言葉に、炊き出しを中心に支援活動を実施している。衛生面に配慮したケータリングカーを準備するなど会社が費用を負担するなか、多くの社員がボランティアに参加している。被災者から「カレンダーがなくて困っている」との声を聞き、夏始まりのオリジナルカレンダーも用意。コミュニケーションを通じて被災者ニーズを確実に拾いながら支援活動を続けている。

セガサミーグループも、被災地の人々に一日も早く震災前の生活を取り戻してもらいたいとの思いから、多種多様に支援活動を展開。昨年6月からは被災地に社員ボランティアチームを派遣し、半年で14回を数えた。具体的には、宮城県東松島市を中心にがれきりや汚泥の撤去作業

に着手。重機が使えないなか、ボランティアチームは手作業による人海戦術でこれら堆積物を丁寧に取り除いている。

実際、社会貢献活動のくくりで捉えれば、遊技産業は数十年にわたる実績がある。ただ、広報目的で実施しているわけではないとの認識から、あえて積極的にアピールしておらず、また記事に取り上げられる機会が少ないことから世間にもあまり知られていないのが実情だ。

しかしながら、これら震災に対する取り組みの一端に触れるだけでも分かるように、遊技産業は「社会とともにある産業の姿」を懸命に模索し、その存在意義の強化に努めている。サステイナブル（持続可能）な社会に向け、CSR（企業の社会的責任）という概念が世間に浸透するなかで、時代や社会ニーズに呼応した活動のさらなる充実を期待したい。

写真にスマホをかざしてください



記事画像をスマホの専用アプリ「CLIC2C」（無料）で読み込むと、関連した情報サイトが閲覧できます。iPhone、Androidいずれでもご利用可能です（一部対応しない機種があります）。

※CLIC2Cご利用の注意点

- ・本サービスはGPSデータを含むアクセス情報を取得しています。
- ・3G回線を使っている場合は通信費用はご利用者の負担となります。